



水俣市では行政と住民が協力してごみ分別に取り組み、リサイクルを推進している



自然と調和した生活を学べる「村丸ごと生活博物館」を訪問

公害の経

病の歴史について講義を受けた。「魚介類を食べることで、私たち人間は少しずつ水銀を体に取り込んでいます。水銀は髪の毛にたまるので、皆さんのも分析してみましたよ」。講師を務めた環境・疫学研究部の蜂谷紀之さんが研修員に結果を配る。「私は数値がずいぶん低いわ」と話すのは、海がないモンゴルからの研修員。一方で、「私たちは島国で魚をよく食べるから数値が高くなるんですね」と、フィジーとマーシャル諸島の研修員は顔を見合わせていた。人間は自然と共に生きている。その自然が汚染されたら、自分にも返ってくるのだ。

心に響く 地域の人々の声

工業化と環境への配慮。これは今、



水俣病総合研究センターで水俣病が発生した経緯について学ぶ

まさに途上国が直面する課題だ。水俣病も、経済発展が重視されたことで工場の操業停止が遅れ、被害が拡大した。モザンビーク環境調整省のマルコス・クラウデオさんは、「私の国では近年発見された石油で産業を興し、工業化を目指しています。将来のために、今、地域の人々に環境の大切さを理解してもらわなければ」と意気込む。

公害を経験した水俣市は、24種類ものごみの分別の他、自然と調和した暮らしが残る地区を「村丸ごと生活博物館」に指定するなど独自の取り組みを進め、2008年に内閣府から環境モデル都市に選ばれた。水銀で汚染された水俣湾のヘドロを埋め立てた「エコパーク水俣」は、環境教育を行うには格好の場。ここにある水俣病資料館では、水俣病の経験を語り継ぐ緒方正実さんの話を聞くことができた。

「水俣病を引き起こした企業やそれを早期に止められなかった県や国。彼らを許せるか許せないか、自分に置き換えて考えてみてください」

家族に水俣病患者がいたために差別を受けたこと、緒方さんの髪の毛の水銀濃度が驚くほど高かったのに行政は対策を取らなかったこと、水俣病患者の申請をしてもなかなか認定されなかったこと…。長年、苦しみと闘ってきた彼の言葉は重い。

二度と、公害による苦しみを繰り返してはならない。研修員たちは緒方さんの話じつと耳を傾け、その思い

を感じ取っていた。「水俣に来たからこそ、生」の声が聞けました。私の国は豊かな自然を売りにした観光が一大産業。次の世代の子どもたちにその大切さを伝えなければと改めて痛感しました」と、ベリーズ環境局のレアル・マルコさんは話してくれた。

また水俣市の人々にとっても、途上国の研修員との交流は貴重な時間だ。水俣市環境モデル都市推進課の大崎伸也さんは、「住民と行政が共に環境保全に取り組む。今の水俣を見てもらい、魅力ある街と言ってもらえることが自信になっています」と話す。

そんな水俣の教訓を受け継ぎ、国際社会における水銀被害を防ぐため、この10月に水銀条約が結ばれた。人と環境が調和して暮らせる未来を目指し、世界の国々と共に、水俣市の挑戦はこれからも続く。



タンザニアの金鉱では、金を取り出すために水銀が使われている。途上国にはまだ水銀中毒の危険性を知らない人も多い

験を世界につなぐ

日本の4大公害病の一つ「水俣病」。
世界に例を見ない公害を経験した熊本県水俣市は、
市と住民が力を合わせて地域を再生し、環境保全に力を入れてきた。
そして今、その経験を世界に伝えている。

[熊本県]

水俣市



水俣市

面積162.89km²。人口約2万7,000人。高度経済成長期に工業都市として発展。1956年から発生した水俣病を乗り越え、リサイクルの推進や、環境マネジメント規格ISO14001の認証を取得するなど、環境保全に積極的に取り組む。2008年には環境モデル都市に認定され、水銀分析やリサイクル、地元の資源を生かしたまちづくりなどのノウハウを開発途上国に伝えている。



語り部の緒方さん(左奥)から水俣病の経験を聞く研修員。「水俣で得たことをそれぞれの国に持ち帰って生かしてほしい」

公害からの 復興に学ぶ

魚湧く海。かつて、水俣湾一帯の不知火海は、そう呼ばれていた。水俣といえ、日本人なら誰もが一度は耳にしたことがあるはずだ。その理由は「水俣病」。戦後、九州でも有数の近代工業都市として発展した水俣市。しかし、水俣湾に流れ込んだ工場排水に含まれたメチル水銀が、海の生き物を汚染していった。何も知らずに地元で捕れた魚を食べ続けた人々は、手足のしびれや言葉が話せなくなるなどの症状に苦しんだ。

それから約60年。豊かな自然はもちろん、水俣病患者への差別や住民同士の対立で壊れてしまった地域のきずなを取り戻すため、水俣市はさまざまな困難を乗り越えてきた。「自然も、人も、コミュニティも、一度壊れたら完全に元に戻すのは難しい。それをなんとか取り戻した経験を世界に伝えるのが私たちの使命です」。水俣病の原因となったメチル水銀を研究する国立水俣病総合研究センター国際・総合研究部の坂本峰至さんはそう話す。水銀被害は、これから工業化を進める開発途上国でも起こり得る。そこで水俣市は途上国からの研修員受け入れなどを通じて、環境に優しいまちづくりを伝えてきた。

2013年11月末には、ホンジュラスやサモア、東ティモール、アルバニアなど、世界各国から環境教育を担当する研修員が同センターを訪れ、水俣